

日蓮大聖人御書全集

うえののあまごぜんごへんじ

上野尼御前御返事

おりよういりよう こと

（烏竜遺竜の事）

新版
1912
〜
1916

うえののあまごぜんごへんじ おりよういりよう こと

上野尼御前御返事（烏竜遺竜の事）

こうあん ねん がつ にち さい うえののあま

弘安3年（'80）11月15日 59歳 上野尼

こめ いちだしとじよう 洗 芋 ひとたわら おく た

顰牙一駄四斗定・あらいいも一俵、送り給びて、

なんみようほうれんげきよう とな

そうら お

南無妙法蓮華経と唱えまいらせ候い了わんぬ。

みようほうれんげきよう もう はちす たと そうろう てんじよう

妙法蓮華経と申すは、蓮に譬えられて候。天上には

まかまんだらけ にんげん さくら はな はな

摩訶曼陀羅華、人間には桜の花、これらはめでたき花なれ

はな ほけきよう たと ほとけと たも

ども、これらの花をば法華経の譬えには仏取り給うことな

いっさい はな なか と わ はな ほけきよう たと

し。一切の花の中に、取り分けてこの花を法華経に譬えさ

たも ゆえそうろう ぜんけご か もう

せ給うことは、その故候なり。あるいは前花後菓と申し

て、花は前に菓は後なり。あるいは前菓後花と申して、菓は

さき はな さき み のち いっけたか たかいつか

前に花は後なり。あるいは一花多菓、あるいは多花一菓、

むけうか しなじな そうら れんげ もう はな み

あるいは無花有菓と、品々に候えども、蓮華と申す花は菓

はな どうじ いっさいきよう くだく さき ぜんこん な のち

と花と同時なり。一切経の功德は、先に善根を作して後に

ほとけ な と ゆえ ふじよう ほけきよう もう

仏とは成ると説く。かかる故に不定なり。法華経と申すは、

て と て ほとけ な くち とな

手に取ればその手やがて仏に成り、口に唱うればその口

すなわ ほとけ たと てんげつ ひがし やま は い

即ち仏なり。譬えば、天月の東の山の端に出ずれば、そ

ときすなわ みず かげ う こえ 響 どうじ

の時即ち水に影の浮かぶがごとく、音とひびきとの同時な

ゆえ きよう い ほう き

るがごとし。故に、経に云わく「もし法を聞くことあらば、

ひと

じょうぶつ

うんぬん

もん

こころ

一りとして成仏せざることなけん」云々。文の心は、こ

きよう

たも

ひと

ひやくにん

ひやくにん

せんにん

せんにん

の経を持つ人は、百人は百人ながら、千人は千人ながら、

いちにん

欠

ほとけ

な

もう

もん

一人もかけず仏に成ると申す文なり。

ごしようそく

みそうら

あまごぜん

じぶ

こまつののろくろう

そもそも、御消息を見候えば、尼御前の慈父・故松野六郎

ざえもんのにゆうどうどの

きにち

うんぬん

しそくおお

こうよう

区

々

左衛門入道殿の忌日と云々。子息多ければ孝養まちまちな

かなら

ほけきよう

ほうぼうとううんぬん

り。しかれども、必ず法華經にあらざれば、謗法等云々。

しゃかぶつ

こんく

せつ

のたま

せそん

ほうひさ

のち

かなら

釈迦仏の金口の説に云わく「世尊は法久しくして後、要

まさ

しんじつ

と

たほう

しやうみよう

い

ず当に真実を説きたもうべし」と。多宝の証明に云わく

みようほうれんげきよう

みな

しんじつ

じつぼう

しよぶつ

ちか

「妙法蓮華經は、皆これ真実なり」と。十方の諸仏の誓い

に云わく「舌相は梵天に至る」云々。

これより、ひつじさるの方に、大海をわたりて国あり。

漢土と名づく。彼の国には、あるいは仏を信じて神を用い

ぬ人もあり、あるいは神を信じて仏を用いぬ人もあり。あ

るいは日本国も、始めはさこそ候いしか。しかるに、彼の

国に烏竜と申す手書きありき。漢土第一の手なり。例せば、

日本国の道風・行成等のごとし。この人、仏法をいみて経

をかかじと申す願を立てたり。この人死期来つて重病を

うけ、臨終におよんで子に遺言して云わく「汝は我が子な

り。その跡絶えずして、また我われよりも勝れたる手跡なり。あまた

たといいかなる悪縁ありとも、法華經をかくべからず」とあくえん

うんぬん

云々。しかして後、五根より血の出ずること泉の涌くがごのち

したやつ

裂

み 碎

じつぼう 分

とし。舌八つにさけ、身くだけで十方にわかれぬ。しかれ

いちるい

ひとびと

さんあくどう

し

じごく

お

ども、一類の人々も、三悪道を知らざれば、地獄に墮つる

せんそう

知

先相ともしらず。

こ

いりよう

もう

かんどだいいち

しゆせき

おや

あと

その子をば遺竜と申す。また漢土第一の手跡なり。親の跡

お

ほけきよう

か

がん

た

とき

だいおう

を追つて法華經を書かじという願を立てたり。その時、大王

しばし

な

ぶつぼう

しん

こと

ほけきよう

おわします。司馬氏と名づく。仏法を信じ、殊に法華經を

仰 たま おな わ くに なか しゆせきだいいち もの

あおぎ給いしが、同じくは我が国の中に手跡第一の者にこ

きよう か じきよう いりよう め りようもう

の経を書かせて持経とせんとて、遺竜を召す。竜申さく

ちち ゆいごん ゆる たま うんぬん だいおう ちち

「父の遺言あり。こればかりは免し給え」と云々。大王、父

ゆいごん もう ゆえ た しゆせき め いっきよう 写 お

の遺言と申す故に、他の手跡を召して一経をうつし畢わん

みこころ かな たま

ぬ。しかりといえども、御心に叶い給わざりしかば、また

いりよう め なんじ おや ゆいごん もう ちん曲 きよう

遺竜を召して言わく「汝、親の遺言と申せば、朕まげて経

うつ はちかん だいもく ちよく したが

を写させず。ただし、八巻の題目ばかりを勅に随うべし」

うんぬん かえ がえ じ もう おういか い なんじ ちち

と云々。返す返す辞し申すに、王瞋つて云わく「汝が父と

わ しん おや ふこう おそ だいもく か

いうも我が臣なり。親の不孝を恐れて題目を書かずば、違勅

いちよく

とが

ちよくじようたびたびおも

ふこう

の科あり」と勅定度々重かりしかば、不孝はさることな

とうざ

せ

脱

難

ほけきよう

げだい

れども、当座の責めをのがれがたかりしかば、法華經の外題

か

おう

あ

いえ

かえ

ちち

墓

む

ち

なみだ

を書いて王へ上げ、宅に帰って父のはかに向かつて血の涙

なが

もう

よう

てんし

せ

おも

な

ちち

を流して申す様は、「天子の責め重きによつて、亡き父の

ゆいごん

違

すで

ほけきよう

げだい

か

ふこう

せ

遺言をたがえて、既に法華經の外題を書きぬ。不孝の責め

まぬか

なげ

みっか

あいだ

はか

はな

じき

た

免れがたし」と歎いて、三日の間、墓を離れず、食を断ち、

すで

いのち

およ

既に命に及ぶ。

みっか

もう

とらのとき

ぜっし

お

ゆめ

三日と申す寅時に、すでに絶死し畢わつて夢のごとし。

こくう

み

てんにんいちにん

たいしやく

え

描

虚空を見れば、天人一人おわします。帝釈を絵にかきたる

むりよう けんぞく てんち じゅうまん

りようと

がごとし。無量の眷属、天地に充滿せり。ここに竜問う

い

て云わく「いかなる人ぞ」。答えて云わく「汝知らずや。我

なんじし

われ

ちち

おりよう

われ

にんげん

とき

げてん

しゅう

はこれ父の烏竜なり。我、人間にありし時、外典を執し、

ぶつぼう

敵

こと

ほけきよう

かたき

ゆえ

仏法をかたきとし、殊に法華經に敵をなしまいらせし故に、

むけん

お

ひび

した

抜

すうひやくど

し

無間に墮つ。日々に舌をぬかるること数百度、あるいは死し、

い

てん

あお

ち

ふ

歎

かな

あるいは生き、天に仰ぎ地に伏してなげけども、叶うこと

にんげん

っ

おも

たよ

なんじ

わ

こ

なし。人間へ告げんと思えども、便りなし。汝、我が子と

ゆいごん

もう

ことばほのお

な

み

せ

して遺言なりと申せしかば、その言炎と成つて身を責め、

つるぎ

な

てん

ふ

くだ

なんじ

ふこうきわ

な

劍と成つて天より雨り下る。汝が不孝極まり無かりしか

ども、我が遺言わ ゆいごんを違えざりし故に、自業自得果ゆえ、うらみが恨恨

たかりしところに、金色の仏こんじき一体、無間地獄ほとけに出現して、

『たとい、法界ほうかいに遍あまねき、善を断ぜんちたる諸たの衆生も、一た

び法華經ほけきようを聞きかば、決定けつじようして菩提ぼだいを成じようぜん』云々。この仏うんぬん、

無間地獄むけんじごくに入り給たまいしかば、大水たいすいを大火たいかになげたるがごと

し。少し苦しみやみぬるところに、我合掌われがつしようして仏ほとけに問と

奉たてまつつて『いかなる仏ぞ』と申せば、仏答ほとけこたえて『我は、

これ汝なんじが子息しそく・遺いり竜りようが只今書ただいまくところの法華經ほけきようの題目だいもく

六十四字ろくじゆうしじの内の妙うちの一字みようなり』といちじ言う。八卷のたまの題目はちかんは八八だいもく

ろくじゅうし ほとけ ろくじゅうし まんげつ な たま むけんじごく だいあん

六十四の仏、六十四の満月と成り給えば、無間地獄の大閻

すなわ だいみょう うえ むけんじごく とうい すなわ みょう

即ち大明となりし上、無間地獄は、『当位は即ち妙なり。

ほんい あらた もう じょうじやつこう みやこ な

本位を改めず』と申して、常寂光の都と成りぬ。我お

ざいにん みな はちす うえ ほとけ な ただいまとそつ ないいん

よび罪人とは、皆、蓮の上の仏と成つて、只今都率の内院

のぼ まい そうろう なんじ つ うんぬん

へ上り参り候が、まず汝に告ぐるなり」と云々。

いりようい わ て か きみ 助 たも

遺竜云わく「我が手にて書きけり。いかでか君たすかり給

わ こころ 書

うべき。しかも我が心よりかくにあらず。いかに、いかに」

もう ちちこた い なんじ 果 無 なんじ て わ て

と申せば、父答えて云わく「汝はかなし。汝が手は我が手

なんじ み わ み なんじ か じ われ か じ

なり。汝が身は我が身なり。汝が書きし字は我が書きし字

なんじ　こころ　しん

て　か　ゆえ　すで　助

なり。汝、心に信ぜざれども、手に書く故に、既にたすか

たと　しょうに　ひ　はな　こころ

りぬ。譬えば、小児の火を放つに、心にあらざれども、物

や　ほけきよう

ぞんがい　しん　な　もの

を焼くがごとし。法華経もまたかくのごとし。存外に信を成

かなら　ほとけ　成

ぎ　し　ぼう

せば、必ず仏になる。またその義を知つて謗ずることな

ざいけ　言　ことさらにざい

かれ。ただし在家のことなれば、いいしこと　故　大罪なれ

ざんげ　易　うんぬん

ども、懺悔しやすし」と云々。

だいおう　もう　だいおう　い　わ　がん　すで

このことを大王に申す。大王の言わく「我が願、既に

験　あ　いりよう　ちようおん　こうむ　くに　挙

しるし有り」とて、遺竜いよいよ朝恩を蒙り、国またこぞ

おんきよう　あお　たてまつ

つてこの御経を仰ぎ奉る。

こころうどの　にゆうどうどの

あまごぜん　ちち

こ

しかるに、故五郎殿と入道殿とは、尼御前の父なり、子

あまごぜん

か　にゆうどうどの

娘

いま

にゆうどうどの

なり。尼御前は彼の入道殿のむすめなり。今こそ入道殿は

とそつ

ないいん

まい

たも

よし

伯

耆

殿

読

聞

都率の内院へ参り給うらめ。この由をはわきどの、よみきか

たま

そうら

ことごと

恩

々

詳

もう

せまいらせ給い候え。事々そうそうにて、くわしく申さず

そうろう

きようきようきんげん

候。恐々謹言。

じゅういちがつじゅうごにち

十一月十五日

にちれん

かおう

日蓮

花押

うえのあま

御

前

ごへんじ

上野尼ごぜん御返事